

「ブリタニアよ、何処へ行く？」
ディケンズにおける外国人嫌いの表象
—— 『リトル・ドリット』の場合

“Oh Britannia, don't you know where you are going?”

The Representation of Xenophobia in Dickens: The Case of *Little Dorrit*

楚 輪 松 人

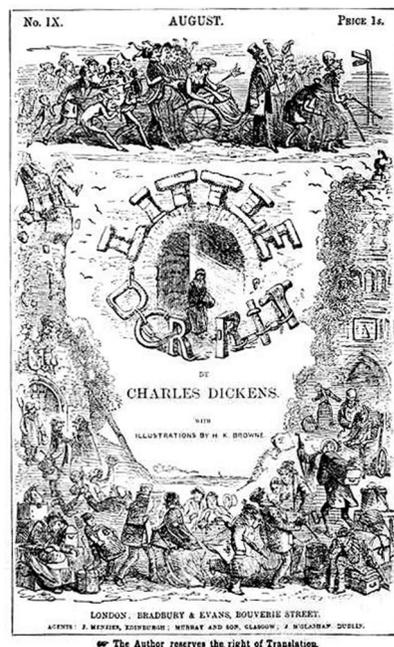
Matsuto SOWA

はじめに

ディケンズ (1812-70) の『リトル・ドリット』(1855-57) は、いわゆる「**英国の状況小説 (Condition-of-England Novel)**」であり、ロシアを相手にしたクリミア戦争 (1853-56) をはじめとして、海外との通商や植民地支配では多くの難題を抱えたヴィクトリア朝時代の社会をめぐるディケンズ版「**サイン・オブ・ザ・タイムズ (時のしるし)**」[マタイ伝 16:3]、好ましくない時代の兆候を示す小説となっている。小説の翻訳者の小池滋氏によれば、ディケンズの長篇小説の多くは、その月刊分冊の表紙絵を見れば作者の意図がよくわかるという (小池 407)。その表紙絵【図版1】を見ると、中央に牢獄の門があり、その周囲に鎖でつながれた文字で、“LITTLE DORRIT”の表題がちりばめられている。その絵の中心に位置する人物が小説のヒロインのリトル・ドリットである。

後期のディケンズは、**シンボル (象徴)** の技法を最大限に利用した。それは物語を一つの総体として捉え、すべての人物を象徴として構想し、あらゆる細部に意味を持たせる技法で、シンボルはお決まりの比喩表現といっ

たレベルを越えて、複雑な指示作用と深い意味合いを持つ。『リトル・ドリット』におけるシンボルは、表紙絵の中心にある牢獄であり、この世界では登場人物の誰もが囚人である。何よりも「全世界はこれ牢獄」(小池



【図版1】 Illustrated wrapper for *Little Dorrit*, No. IX [August 1856] (Philpotts 14)

411) という雰囲気こそが作品に重要な意味を与えている。

「時のしるし」としての『リトル・ドリット』。作者の暗示は明らかである。表紙絵の上段の中央には、英国を象徴する女神ブリタニアが描かれている。彼女はポセイドンの三叉戟と、ユニオンジャックの模様を描いた楯を膝の上に置き、アテナの兜をかぶった頭は頬杖をついてうたた寝をしている。そして彼女を先導しているのは杖をついた二人の盲人である。月刊分冊の表紙絵は読者に問いかけているように見える。「ブリタニアよ、何処へ行く？」と。以下の考察では、小説が提示する「時のしるし」、そしてそれに対するディケンズの対処法が何であったかを論じてみたい。

第1章 「ゼノフォビア（外国人嫌い）」の小説

『リトル・ドリット』はディケンズの「ゼノフォビア（“xenophobia”）」をめぐる小説である。『オックスフォード英語大辞典（OED）』によれば、その定義は“A deep antipathy to foreigners”（OED 2nd ed. XX. 674）、すなわち「外人に対する根強い反感」であり、初出は1909年5月13日の『アシニアム』誌からの引用、「彼らの正義感は偏見やゼノフォビーによって損なわれていない（Those whose sense of justice . . . is not impaired by prejudice or ‘xenophobia.’ 1909 *Athenaeum* 13 May 325/3）」というものである。換言すれば、この単語は20世紀初頭、最初の10年間に英語の語彙の中に入った非常に新しい語であり、この語をディケンズの1857年の小説『リトル・ドリット』を論じるのに用いることは確かに**アナクロニズム（時代錯誤）**である。しかしヴィクトリア朝の英国人が外国人と接触するとき、この語が含意する反感や恐怖を感じなかったというわけではない。それどころか最

近の研究は次のように指摘する。

ゼノフォビアの感情は、19世紀中葉、容易に引き起こされただけでなく、ゼノフォビアの言説・習慣・イデオロギーは広範囲にわたり、英国人の想像力の産物の重要部分であった。

[N]ot only were xenophobic sentiments easily provoked at mid-century, but xenophobic discourses, practices, and ideologies were widespread and part and parcel of the English imaginary. (Bachman 106)

実際、ディケンズの中期の小説にもゼノフォビアの言説は見られる。『リトル・ドリット』以前の小説で、ディケンズにおける外国人の表象として特筆すべきは、オルタンスとマダム・ドファルジュの二人であり、いずれも女性、そして殺人者である。『荒涼館』（1852-53）のオルタンスは、レディ・デッドロックに仕える南フランス出身の勝気なメイド。そのプライドはレディ・デッドロックの上を行く人物である。そのモデルは、1849年11月13日、サザックの「ホースマンガール・レイン監獄」で公開処刑されたスイス人女殺人者マリー・マニング（Marie Manning, 1821-49）だと言われる（Bentley 124）。ディケンズはその公開処刑を目撃している。また、『二都物語』（1859）のマダム・ドファルジュは、復讐心に燃え、フランス人もイギリス人も等しく、フランス革命の恐怖の象徴であるギロチンの餌食とする。オルタンスとマダム・ドファルジュ、いずれも英国には見られない種類の女性人物であり、彼女たちはディケンズの**ジャイナフォビア（女性恐怖）**と**ゼノフォビア（外国人嫌い）**が一体化した創造物となっている。その後、年齢を重ねるにつれて、ディケンズのゼノフォビアはその激しさを増していくことになる。

1857年の小説『リトル・ドリット』の主人公アーサー・クレナムはゼノフォビアである。小説の冒頭、彼は東洋について言う。「われわれは東洋から来たわけで、東洋というのは疫病の国ですから—— (“... as we come from the East, and as the East is the country of the plague—” [Dickens, *LD*. II: 13])。無論、政治的には正しくない発言である。この発言は主人公クレナムの個人的偏見か、それとも当時の読者一般の偏見か、それともディケンズの東洋に対するゼノフォビアの表出なのか。

ディケンズの東洋人に対するゼノフォビアの感情は、『リトル・ドリット』の連載が終わった頃に東洋で起きた大事件、「インド大反乱 (Indian Rebellion, 1857-59)」[かつては「セポイの反乱」(Mutiny of Sepoy) と呼ばれた植民地インドでの反乱]を前にして、その極致に達する。友人のクーツ女史 (Angela Burdett-Coutts, 1814-1906) 宛の手紙 (1857年10月4日) は、ディケンズの**レイシズム (人種差別)** 思想、そして**ジェノサイド (大量殺戮)** 嗜好を示すものとしてしばしば引用されるものである。激昂したディケンズは熱く訴える。自分がインドの最高司令官ならば、くだんの東洋人を皆殺し、絶滅させると。

小生がインドの最高司令官であればよかったですのと思います。そうであれば、あの東洋の民族を驚きで打ちのめすべく、いの一掃にすることは (少なくとも彼らがロンドンのストランド街やキャムデン・タウンに住んでいるとは考えずに) 彼らの言語で、自分は神の許しによって最高司令官の地位に就いているのであり、最近の残虐行為の証拠となった血潮に対して責任を負う人種を絶滅するために、全力を挙げて根絶することを彼らに宣言することで。自分がインドにいるのも、他でも

ないその目的遂行のためであり、大至急かつ慈悲深くも速やかに処刑を実行して、彼らを人類から消し去り、この地球上から抹殺する作業に取りかかることである、と言わせてもらいます。I wish I were Commander in Chief of India. The first thing I would do to strike that Oriental race with amazement (not in the least regarding them as if they lived in the Strand, London, or at Camden Town), should be to proclaim to them, in their language, that I considered my holding that appointment by the leave of God, to mean that I should do my utmost to exterminate the Race upon whom the stain of the late cruelties rested; and that I begged them to do me the favor to observe that I was there for that purpose and no other, and was now proceeding, with all convenient dispatch and merciful swiftness of execution, to blot it out of mankind and raze it off the face of the earth. (Dickens, *Letters* 8: 459)

父親が死んだために久しぶりに中国から帰ってきた英国人商人、主人公アーサー・クレナムの東洋に対する偏見は、実は、彼が長年の中国での生活により毒された人物として設定されていることを物語る。彼は解毒剤が必要な人物なのである。そのことはこの場面でのクレナムの会話の相手、その独善性、島国根性、そして卑俗性までもが抉り出されることになる英国中産階級の間人、引退した銀行家ミーグルズ氏も同類である。アーサー・クレナムとミーグルズ氏。二人の外国人嫌いの英国人と対峙する形で、作品には二人の外国人が設定されている。小説に登場する外国人はイタリア人とフランス人である。ディケンズ批評史において、この二人に最初の注目し

「ブリタニアよ、何処へ行く？」ディケンズにおける外国人嫌いの表象—『リトル・ドリット』の場合（楚輪 松人）

たのはヴィクトリア朝のディケンズ批評家 G. K. チェスタトン (1874-1936) であった。

第2章：『リトル・ドリット』の二人の南欧人

チェスタトンはディケンズの小説における外国人について次のように言う。

ディケンズの小説の中で人目を惹く形で紹介されている南欧人はたったの二人しかないが、『リトル・ドリット』に登場するこの二人は、イギリス人に人気のある種族の外国人であり、芝居に出てくるような紋切り型の外国人と私は書いてしまいそうになった。イギリス人の目から見れば極悪さというのが南欧人の一つの特徴なのであって、かくしてその外国人の一人は極悪人に仕立て上げられるのである。陽気さというものはイギリス人の目には南欧のまた別の特色に映るのであり、かくしてもう一人のほうは陽気な人物ということになるのだ。

The only two southerners introduced prominently into his novels, the two in *Little Dorrit*, are popular English foreigners, I had almost said stage foreigners. Villainy is, in English eyes, a southern trait, therefore one of the foreigners is villainous. Vivacity is, in English eyes, another southern trait, therefore the other foreigner is vivacious. (Chesterton 129)

前述の二人の外国女たちが殺人者であったように、二人の外国男たちも犯罪者である。二人とも裁判を待つ囚人として作品に登場する。【図版2】は彼らを描いた挿絵である。

挿絵の右側に位置する小さな男、ジョン・バプティスト・カヴァレットは、貧しいながらも陽気なイタリア人の船乗りで、マルセイ



【図版2】“Rigaud and Cavalletto” by Sol Eytinge 1871, Wood engraving. Second full-page illustration in the Ticknor and Fields (Boston, 1871)

ユでのちょっとした密輸罪の容疑で、もう一人の外国人リゴートと同じ監房に入れられ、裁判を待っている。その後、カヴァレットは貧しい難民としてイギリスに渡り、アーサー・クレナムに雇われ、その結びつきから貧乏長屋に定住することになる。彼は後にクレナムを助け、良い外国人であることが判明する。イタリア人カヴァレットをめぐるディケンズのテキストは、前述のように、ゼノフォビアという感情が20世紀になってから誕生したのではなく、19世紀中葉にすでに存在していたことを物語る。イタリアからの陽気な難民に対するゼノフォビアによる偏見は、カヴァレットが逗留することになるブリーディング・ハート・ヤードの住人の反応として描かれている。ブリーディング・ハート・ヤード、それは「血を流す心臓の中庭」という意味の貧乏長屋である。ロンドンのホルボーンにあり、貧しいカヴァレットにとっては恰好の住処となる。以下、便宜的に数字と下線を施した部分は、貧乏長屋の住人のイタリア人に対

するゼノフォビアの具体例，その七つの偏見である。そして偏見のそれぞれにディケンズのコメントが続いている。

足が不自由だろうと自由だろうと，外人がブリーディング・ハート・ヤードの住人と一緒に暮らすのは難しい仕事だ。第一に，ここの住人は，[1] 外人という奴は全部ナイフを懐に隠しているのだ，と漠然と信じ込んでいたのだから。第二に，[2] 外人はすべて自分の国に帰るべし，こそ建国以来の健全なる国是であると考えていたからだ。もしこの国是が一般に容認されたら，われらの同胞のどれほどの数が世界各地から帰って来て，故国の手にあまることになるか，などとは考えてみたこともなかった。とにかくこれこそイギリス独特固有の国是だと思っていたわけである。第三に，[3] イギリス人でないというのは，外人に加えられた一種の天罰であって，奴らの国に諸々の不幸災難が降りかかるのは，その国がイギリスのやらぬことをやり，イギリスのやることをやらぬからである，と考えていたことである。

It was uphill work for a foreigner, lame or sound, to make his way with the Bleeding Hearts. In the first place, [1] they were vaguely persuaded that every foreigner had a knife about him; in the second, [2] they held it to be a sound constitutional national axiom that he ought to go home to his own country. They never thought of inquiring how many of their own countrymen would be returned upon their hands from divers parts of the world, if the principle were generally recognised; they considered it particularly and

peculiarly British. In the third place, [3] they had a notion that it was a sort of Divine visitation upon a foreigner that he was not an Englishman, and that all kinds of calamities happened to his country because it did things that England did not, and did not do things that England did. (Dickens, *LD*. I. 25: 254)

ディケンズの貧乏長屋の住人のゼノフォビアをめぐるその信仰箇条の列挙はさらに続く。

というわけで，以上がブリーディング・ハート・ヤードの住人の政治上の立場とってよかろう。だが，ヤードに外人が住むことへの反対理由をこれ以外にも持っていた。[4] 外人はいつでも貧乏人だと信じ込んでいたのだ。住人自身がこの上なしの貧乏人だったけれども，だからといって彼らの反対理由が弱まるわけではなかった。[5] 外人は竜騎兵で蹂躪され，銃剣で串刺しにされる民族と信じ込んでいたのだ。自分らだってちょっと不機嫌になれば頭蓋骨を割られちゃうことは間違いないのだが，これは鈍器でやるのだから構わないのだそうだ。[6] 外人はいつも不道德だと信じ込んでいた。この国にだって時折裁判は開かれるし，時々，二，三の離婚事件が起こるのだが，それは関係ないのだそうだ。[7] 外人は独立自尊の精神を持たぬと信じ込んでいた。つまり，国旗がはためき「ルール・ブリタニア（英国よ，統治せよ）」が鳴り響く中を，デシマス・タイト・バーナクル閣下によって家畜の群よろしく，投票所へ護送されることがないからだそうだ。

This, therefore, might be called a

political position of the Bleeding Hearts; but they entertained other objections to having foreigners in the Yard. [4] They believed that foreigners were always badly off; and though they were as ill off themselves as they could desire to be, that did not diminish the force of the objection. [5] They believed that foreigners were dragooned and bayoneted; and though they certainly got their own skulls promptly fractured if they showed any ill-humour, still it was with a blunt instrument, and that didn't count. [6] They believed that foreigners were always immoral; and though they had an occasional assize at home, and now and then a divorce case or so, that had nothing to do with it. [7] They believed that foreigners had no independent spirit, as never being escorted to the poll in droves by Lord Decimus Tite Barnacle, with colours flying and the tune of *Rule Britannia* playing. Not to be tedious, they had many other beliefs of a similar kind. (Dickens, *LD*. I. 25: 254)

外国人に対するこの種の偏見や誤謬は、教養のない貧乏長屋の住人に特有のものではない。すでに1840年10月号の『エディンバラ・レビュー』の「イタリアとイタリア人」という記事には、イギリス国民全般に蔓延したイタリア人に対する偏見、すなわちイタリア人は、危険で、汚く、不誠実で、迷信深い国民という**ステレオタイプ（固定観念）**が存在していたことを紹介している。

海外を見聞する機会に恵まれたイギリス人の間でも、知らず知らずのうちに、数え上げるだけでも何頁もの紙面を割くことになるような国民的偏見を免れ

ている者はほとんどいない。イタリア人はローマ教皇礼賛者である——床にツバを吐く——百姓は喧嘩となればナイフを抜く——紳士は晩餐会を開かない。（中略）暗殺は、スペイン人がありふれたものにしてしまったが、未だに外人にまつわる根拠のない恐怖の素である。最近の英国人旅行者の最も知的な人間でさえ、ローマでは平均して毎日一件の殺人が行われると信じるようになっていく。

Even those few among our countrymen who have enjoyed good opportunities of observation, are hampered, unwittingly, by a burden of national prejudices which it would take pages merely to enumerate. The Italians are Papists—they spit on the floor—the peasantry draw their knives when they quarrel—the gentlemen do not give dinners. [...] Assassination, again, which Spanish rule made so common, is still the bugbear of foreigners; and one of the most intelligent of our recent travellers has allowed himself to believe that in Rome there is committed on an average one murder daily. (Von Raumer 161-62)

『リトル・ドリット』のもう一人の外国人はリゴー（別名ブランドワ）である。ディケンズの全作品を通して認められるように、ディケンズの世界では何についても善玉と悪玉がいなければならない。『リトル・ドリット』においても、ディケンズの世界の住人にふわさしく、良い外国人と悪い外国人がいる。カヴァレットが良い外国人で、リゴーは悪い外国人である。小説の冒頭、リゴーはカヴァレットと同じ監房で、妻殺しの容疑者として、裁判を待っている。彼はフランス人で、紳士と自称する悪党である。他人には自分を紳士

として扱うように要求しながら、決して紳士のように振る舞うことはない。フランスではラニエとして名乗り、英国ではブランドワとして知られ、クレナム夫人に対して恐喝を企てている。前述の引用にあったように、チェスタトン「芝居に出てくるような紋切り型の外国人(stage foreigners)」と示唆しているが、果たして彼はメロドラマに登場する紋切り型の外国人なのか。リゴーを描写するディケンズのテキストには次のようにある。

口髭がずり上がったり鼻がずり下がったりして、悪党らしい笑みを浮かべ、目は染めた髪の毛と同じ色をしているかのように見え、光を反射するという自然の能力が染色によって失われてしまったかのように見えるこの男の上に、いつも正しく決して過ちを侵すことのない自然の女神が、「この男に注意！」という貼り札をしてくれた。

On this man, with his moustache going up and his nose coming down in that most evil of smiles, and with his surface eyes looking as if they belonged to his dyed hair, and had had their natural power of reflecting light stopped by some similar process, Nature, always true, and never working in vain, had set the mark, Beware! (Dickens, *LD*. I. 30: 295)

まさにメロドラマの舞台から出てきたような悪党である。ところ変わればその名やアイデンティティを変える男。リゴー／ブランドワ／ラニエとその名は三つ。剣呑な表情、悪魔のような声を出さない笑いを浮かべて、犯罪を求めてヨーロッパを股にかけて徘徊する、神出鬼没の怪盗である。一見、薄っぺらな**ストック・キャラクター（典型的人物）**のように見える。果たしてディケンズはこの悪党に現実感を付与することに失敗したのか。この

悪党は、名目上の仇役であって、階級社会の虚偽を戯画化した人物として以外に、物語全体と有機的なつながりを持っていないのか。作者ディケンズの社会的メッセージに消極的な形でしか関与していないのか。答えはノンである。小説の挿絵【図版2】を考慮しながら、この「紳士悪党／悪党紳士」の正体を分析したエドモンド・ウィルソン(1895-1972)の洞察は実に鋭いものである。



【図版3】 Napoleon III. A portrait by Frank Moore Colby. *Outlines of General History* (New York: American Book Company, 1899)

その挿絵から判断すると、この人物はナポレオン三世——ディケンズはその治世を忌み嫌っていた——の戯画のようなものとして意図されていたらしいが、その場合、ブランドワとクレナム商会の結びつきは、派手な見せかけで偽装された第二帝政の怪しげな経済活動と、もっともらしい仮面の背後に隠れたおよそ非人間的なイギリス商人の利害との密接な関係を象徴するのかもしれない。すると、ブランドワが最後にクレナム商会の建物の下敷きになるのは、当時、既に多くの人々が予言していたナポレオン三世とその帝国の崩壊に重ねられるだろう。

Though the illustrations suggest that he may have been intended as a sort of cartoon of Napoleon III, whose régime Dickens loathed — in which case the tie-up between Blandois and the Clennams may figure a close relationship between the shady financial interests disguised by the flashy façade of the Second Empire and the respectable business interests of British merchants, so inhuman behind their mask of morality. Blandois is crushed in the end by the collapse of the Clennams' house, as people were already predicting that Napoleon would be by that of his own. (Wilson, 46-47)

ブランドワは、まさしく「犯罪界のナポレオン」である。ディケンズは『リトル・ドリット』に続く『大いなる遺産』（1860-61）において、当時の**ツァイトガイスト（時代精神）**が良しとした**ジェントルマン・イデアール（紳士の理念）**を解剖した。そしてその診断結果は、「紳士＝犯罪者」というものであった。時代の社会悪を具体的に象徴する似非紳士コンペysonの人物造型において成就することになる「紳士悪党／悪党紳士」、その原型・萌芽がリゴー（別名ブランドワ）なのである。彼は国境を超えて悪事を行うが、稀にしか姿を現さない。犯罪を求めてヨーロッパを股にかけて暗躍する神出鬼没の怪盗を思い描くとき、ディケンズの同時代人コナン・ドイル（1859-1930）が創出した名探偵シャーロック・ホームズの言葉、その宿敵「モリアーティ教授」を説明して、ワトソンに語る言葉を想起するのもあながち的外れではないのである。グローバル化する**悪のシンジケート（犯罪組織）**の黒幕を説明して、ホームズは次のように言う。

「ワトソン、彼は犯罪界のナポレオン

だ。大都市ロンドンの半分の悪事、ほぼすべての迷宮入り事件が、彼の手によるものだ。しかも天才で、学者で、理論家で、第一級の頭脳の持ち主だ。彼は蜘蛛の巣の中心にいる蜘蛛のようにじっと座っているだけだが、その蜘蛛の巣は実に無数の放射状の網目になっていて、どの糸のわずかな震えでもすぐに彼に伝わるようになっている。彼自身はほとんど何もしない。計略を立てるだけだ。」

“He is the Napoleon of crime, Watson. He is the organizer of half that is evil and of nearly all that is undetected in this great city. He is a genius, a philosopher, an abstract thinker. He has a brain of the first order. He sits motionless, like a spider in the centre of its web, but that web has a thousand radiations, and he knows well every quiver of each of them. He does little himself. He only plans.” (Doyle 471)

この「モリアーティ教授」にも等しいブランドワが象徴するような巨悪に対して、ディケンズが対処法として提示するのがリトル・ドリットなのである。

第3章：悪に立ち向かうリトル・ドリット

小説『リトル・ドリット』は「全世界はこれ牢獄」という社会的**パラブル（寓話）**である。と同時に、遺産の本当の相続人は誰かという謎をめぐる**ミステリー（推理小説）**の要素も含んでいる。謎の解決は物語の教訓、すなわち作者の社会的なメッセージに合致する。謎をめぐる複雑なプロットを解明すれば、遺産の本当の相続人はアーサー・クレナムの実の母親、彼の生みの親であった娘の保護者であったフレデリック・ドリットの姪、すなわちリトル・ドリットであるということが判

明する (Holloway 896-7)。その謎を封印していたのが、主人公クレナムの育ての親、クレナム夫人である。ロンドンにあるクレナムの実家、一階にクレナム商会の古い事務所のあるその屋敷は、ヴィクトリア朝を支えた柱の一つである厳格なカルヴァン主義に基づく冷徹なビジネスの砦である。クレナム夫人がリトル・ドリットを追い求めて屋敷の外に走り出た間、前述のウィルソンの引用にあったように、その屋敷は、突如、ブランドワを押しつぶす形で崩壊する。それはクレナム夫人が体現する価値観の崩壊でもある。

作品中、クレナム夫人と対峙されるリトル・ドリットは、骨の髄まで**ドメスティック (国産の／家庭的な)**人物である。彼女は、ディケンズがこれまで賛美してきた一連の女性たち—ルース・ピンチ、フロレンス・ドンビー、アグネス・ウィックフィールド、エスター・サマソン—など「**家庭の天使 (The Angel in the House)**」の系譜にある。英国的生活の明るく燃える暖炉の炎であり、ディケンズがこれまで敬い、信頼してきた、自然で陽気な率直さ、独立心、本能的な美德の象徴である。彼女たちは、献身的で、自己を強く出すことなく、自ら進んで愛を求めることさえできない内気な娘たちである。リトル・ドリットもアーサー・クレナムの恋人として浮かび上がるまでは日陰の存在である。言わば、その姿はワーズワスの「**ルーシー詩篇 (Lucy Poems)**」のひとつに登場する美しい乙女のようなものである。

苔むす岩かげの堇のごとく
人の目につくこともなく。
——「その女は人里離れて暮らした」
(山内 72-73)
A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye!
—‘She Dwelt among the Untrodden

Ways,’ ll. 5-6.

しかし、近年のヴィクトリア朝社会についての論文集、『恐怖、嫌悪、そしてヴィクトリア朝のゼノフォビア』 (*Fear, Loathing, and Victorian Xenophobia*, 2013) の編者の一人によれば、彼女はイギリスの日陰の国内産業を寓意するという。「『リトル・ドリット』は、外国の汚染は、国内投資により封じ込めることができるという希望を提示した (*Little Dorrit presented hope that the foreign pollution could be contained by domestic investment; Tromp 42*)」と。海外との取引に汚染されたクレナムが最終的に救われるのはリトル・ドリットの愛による。そして有毒な外国への投資は、国内における新しい投資によって浄化されるというのである。

小説の最後でリトル・ドリットに救われることになるアーサー・クレナムが思い描くリトル・ドリット像、それは作者ディケンズが英国の未来を信託するリトル・ドリット像でもある。

愛しいリトル・ドリット。

彼の哀れな一生を振り返ってみる時、彼女はその人生の道の消失点に位置していた。それに至る間に見えるすべてのものは、彼女のあどけない姿に向かっていた。それに向かつて彼は何千マイルもの旅をして来たのだ。以前に不安に満ちた希望や疑念は、その姿の前で消えてしまった。それは彼の人生の関心の中心だった。それは人生におけるすべての善なるもの、楽しいものの究極であった。その彼方には、単なる暗黒の虚空と荒野しかなかった。

Dear Little Dorrit!

Looking back upon his own poor story, she was its vanishing-point. Everything in its perspective led to her innocent figure.

He had travelled thousands of miles towards it; previous unquiet hopes and doubts had worked themselves out before it; it was the centre of the interest of his life; it was the termination of everything that was good and pleasant in it; beyond there was nothing but mere waste and darkened sky. (Dickens, *LD*. II.27: 613)

19世紀の英国にとっての救国のジャンヌ・ダルクは、孤立無援の一人の乙女、敢然と悪に立ち向かわなければならぬリトル・ドリットである。彼女は、前述のオルタンスやマダム・ドファルジュのような、力強い女ではない。作品が提示する諸外国からの影響に対する対処法がリトル・ドリット、訳せば「ドリットちゃん」では力不足だという事実は否めない。しかし、これが諸外国の恐怖に対処するためのディケンズの解答である。そしかなにもディケンズの楽観的な見解なのである。

むすびに

2016年6月、英国は欧州連合（EU）を離脱することを決定した。「**ブレグジット（Brexit）**」である。英国国民による移民の流入制限である。かつての英国は、海外からの避難民にとっての新天地であった。「**1905年の外国人法（The Aliens Act 1905）**」が制定されるまで、イギリスにはいわゆる「移民法（入国管理法、移民関係の法律、移民に関する法律）」というものが実質的には存在しなかった。第一次世界大戦までパスポートは問題にならなかったのである。ヨーロッパ各地から、カトリック系のアイルランド人、ドイツ人、そしてロシアからも皇帝の迫害を恐れようとして強制集住地域からユダヤ人が大挙して英国にやってきた。「門戸開放政策」をとり続けたヴィクトリア朝の英国は移民を受け入れてきたの

である。今回のブレグジットをめぐる英国国民の決断は、時代の流れに逆行するまさかの出来事であった。ある邦人金融機関のロンドン支店長は感慨した。「英国よ、何処へ？」（梅垣32）と。

英国の象徴とされる女神ブリタニアをその月刊分冊の表紙絵に冠する小説『リトル・ドリット』。その結末は同時代の社会に対するディケンズのはかない希望の表明である。「幸せと奉仕のつつましい生活の中へと下りて行った（Went down into a modest life of usefulness and happiness. [Dickens, *LD*. II. 34:688]）」。原文ではこの文には主語が明示されていない。無論、それはリトル・ドリットとアーサー・クレナムの二人であろう。しかし、この小説が表紙絵の女神ブリタニアの図像が示唆するように、**ブリタニア（英国）**の行方を示す小説であるとすれば、英国を主語と見なすことも可能である。英国は落ちて行く「斜陽国」というわけである。この小説についてエドモンド・ウィルソンは言う。

リトル・ドリットとアーサー・クレナムの恋愛には情熱はほとんど感じられず、むしろ醒めた諦め、ほとんど悲哀といってよいようなものが漂う。

In the love of Little Dorrit and Clennam, there seems to be little passion, but a sobriety of resignation, almost a note of sadness. (Wilson 48)

確かに、小説の結末にあるのは「**醒めた諦め（a sobriety of resignation）**」である。

ディケンズの親友フォースター宛の手紙（1855年2月3日）は、彼の政治に対する不信と不満を表明している。前年の冬のクリミア戦争でのイギリス軍の失敗が、彼の急進主義を大いに激昂させたのである。

政治の貴族主義と権門追従がイギリスの滅亡を招くという小生の持説は一刻

ごとに強まるばかりです。この方面すべての点で一条の希望も見えません。

I am hourly strengthened in my old belief, that our political aristocracy and our tuft-hunting are the death of England. In all this business I don't see a gleam of hope. (Dickens, *Letters 7*: 523)

「仕事ヤルベカラズ」(HOW NOT TO DO IT; Dickens, *LD. I. 10*: 85) を標榜する「迂遠省(The Circumlocution Office)」をはじめとして、イギリス官界・政界に巣くう一大勢力、バーナクル(ふじつば、しがみついて離れない者、の意)一族やスティルトストーキング(竹馬で偉そうにのし歩く、の意)一族は、頑迷固陋、旧套墨守で、旧態依然として上流階級を支配し続ける。また海外との取引で急成長を遂げた中産階級も、その「ケチな愛国心(Dickens, 'Cheap Patriotism')」で、彼らの愛国主義と拝金主義をもって尊大に振る舞い続ける。すると月刊分冊の表紙絵は、今一度、注視に値することになる。女神ブリタニアが乗っている車椅子に似た二輪戦車を押しているのは、事もあろうに鈴の付いた道化帽をかぶっている紳士然とした男たちである。

結局、中年男とお針子娘のロマンス、その偶然の出会いから結婚に至るまでのプロセスを描いたこの小説は、社会全体を巻き込み、それに救いを与えるような展開にはならない。上流階級に権勢を振るう一族、そしてぬくぬくと生きる中産階級は、アーサー・クレナムとリトル・ドリットとの結婚によって何の感化も変化もこうむることはない。英国にはもはや進歩も発展も期待できない。ただ、アーサー・クレナムを助けたイタリア人カヴァレットの善意、発明家ダニエル・ドイスのクレナムに対する友情、そしてクレナム夫人の憎しみに対して赦しをもって応じたりトル・ドリットの愛情。彼ら個人間の信頼関係

を信頼するのみである。これが多難な時代に書かれたディケンズの「英国の状況小説」の結論なのである。

Works Cited

- Bachman, Maria K. 'Charles Dickens, Wilkie Collins, and the Perils of Imagined Others.' Tromp *et al.* 101-23.
- Bentley, Nicholas, Michael Slater and Nina Burgis. *The Dickens Index*. Oxford and New York: OUP, 1988.
- Chesterton, G. K. *Charles Dickens* (1906) in G. K. Chesterton, *Collected Works. Volume XV: Chesterton on Dickens*. San Francisco: Ignatius Press, 1989.
- Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. Oxford World's Classics. Ed. Andrew Sanders. Oxford and New York: OUP, 1988.
- . *Bleak House*. Oxford World's Classics. Ed. Stephen Gill. Oxford and New York: OUP, 1996.
- . 'Cheap Patriotism.' *Household Words* 11 (9 June 1855): 433-35.
- . *Little Dorrit*. Oxford World's Classics. Ed. Harvey Peter Sucksmith. Oxford and New York: OUP, 1982.
- . *The Letters of Charles Dickens, 12 vols.* Eds. Madeline House, Graham Storey, Kathleen Tillotson, Nina Burgis, *et al.* Oxford: Clarendon; British Academy, 1965-2002.
- Doyle, Arthur Conan. 'The Final Problems (1893).' *Memoirs of Sherlock Holmes. The Penguin Complete Sherlock Holmes*. Harmondsworth: Penguin Books, 1981.
- Holloway, John. "Appendix A: *The Dénouement of Little Dorrit*." *Little Dorrit*. Ed. John Holloway. Harmondsworth: Penguin Books, 1982, pp. 896-97.
- Philpotts, Trey. *Companion to Little Dorrit*. Dickens Companions 9. Helm Information, 2003.
- Tromp, Marlene, Maria K. Bachman and Heidi Kaufman, eds. *Fear, Loathing, and Victorian Xenophobia*. Columbus: Ohio State UP, 2013.
- Tromp, Marlene. 'The Pollution of the East: Economic Contamination and Xenophobia in *Little Dorrit* and *The Mystery of Edwin Drood*.' Tromp *et al.* 27-55.
- Von Raumer, Frederick. 'Italy and the Italians.' *The Edinburgh Review* 72 (Oct., 1840): 159-78.
- Wilson, Edmund. "Dickens: The Two Scrooges," (1941)

「ブリタニアよ、何処へ行く？」ディケンズにおける外国人嫌いの表象—『リトル・ドリット』の場合（楚輪 松人）

The Wound and the Bow: Seven Studies in Literature.

New York: Farrar Straus Giroux, 1978.

梅垣 健. 「英国よ、何処へ?」『金融市場』（農林
中金総合研究所）第28巻第4号通巻317号（2017
年04月号）：32頁.

小池 滋. 「『リトル・ドリット』について」『集英
社版 世界文学全集34 リトル・ドリット II』
東京：集英社, 1980, pp. 407-24.

山内久明編. 『対訳 ワーズワス詩集——イギリス
詩人選 (3)』東京：岩波書店, 1998.

附記

本論文は、日本英文学会中部支部第70回大会（2018年10月27日、愛知学院大学名城公園キャンパス）での「シンポジウム 第1室（英語圏文学・文化）『英語圏文学・文化における移民・外国人の表象』」で発表したものです。シンポジウムの講師の一人として貴重な機会をいただいたことに対して、司会・講師の松本三重子氏（愛知県立大学名誉教授）及び第70回大会事務局の方々に深く感謝申し上げます。